

歴史探訪

クラブ 其の177

History Inquiry Club



文化財課 ☎ 27-1720
(博物館) FAX 22-2028



●吉胡貝塚調査隊
(左上／石井常次、右端／中山英司)

国営発掘の写真撮影をした石井常次のこと

吉胡貝塚の展覧会のため、古い写真を調べていた時です。昭和26年の発掘調査関係者の記念写真の中で明

らかに雰囲気の違いが人物に目が留まりました。その後、調査に参加した先生から、その人物は田原市出身の石井常次といひ、伊奈森太郎とともに南山大学人類学民族学研究所に所属し、写真技師だったことを伺い大変驚きました。吉胡貝塚の発掘調査は国家事業。考古学の先生とその学生で構成されていた調査隊のメンバーに田原の人が加わっていたとは全く知らなかったからです。

石井常次は明治38年に福江町で生まれ、大正12年に豊橋商業学校を卒業後に豊橋市内の書店、写真や映写機器を製造販売する会社などを経て、昭和24年11月12日に南山大学人類学民族学研究所の所員となりました。10月には伊奈森太郎が入所しており、すでに郷土教育者、県の文化財保護の重鎮だった伊奈を研究所の創設メンバーとして迎えた際、石井の写真の腕を見込み伊奈の口利きにより入所したと思われまふ。

研究所の副所長は偶然にも吉胡貝塚の調査をした清野謙次の弟子の教授の中山英司でした。入所後、石井は中山の指導の下、学生らとともに県内の遺跡の調査を進めました。同



●南山大学人類学民族博物館前(右端／石井常次)

時に資料を収集し、展覧会も催すなど、研究だけでなく保護や普及にも努め、研究所の活動内容は高い評価を受けます。その研究所の華々しい活動の写真記録を任されたのが石井で、調査員として学生の面倒を見つつ研究所を支えていました。石井は国の初めての発掘調査、報告書の刊行事業であった吉胡貝塚の報告書にも調査補助員、写真係としてその名を連ねています。田原出身者では、石井ただ一人です。石井は専門に学問を学んだわけではありませんが、学者にも信頼された仕事ぶりだったのでしよう。学歴もない人間が第一

線の研究に携われる当時の社会と人の懐の深さを感じました。

石井に会ったことのある人にお話を伺うと、とってもダンディーな紳士であったと聞きます。写真の中でも際立っていたのはそのためです。

昭和32年、中山副所長の突然の死によって研究所は方向転換を強いられました。それにより所員は異動を余儀なくされ、石井は翌年に図書館勤務、伊奈に至っては昭和34年に大学を去りました。その後石井の名を見ることはありません。

石井は論文を書いた考古学者でも、作品を残した写真家でもなく陰で学問の発展を支えました。しかし、その生き方になぜか興味を覚えまふた。田原出身者が国家事業であった吉胡貝塚の発掘調査を支えたことをここに記しておかなければ、彼のことは忘れ去られてしまうに違いありません。昭和26年の吉胡貝塚調査の寄せ書きにふるさとを思う石井の人の柄を表すことばが添えられています。

「吉胡貝塚にて旧友に逢ふ
菜の花や幼な名に友を呼びとめて」

(増山)